

第15回渡良瀬遊水地湿地保全・再生モニタリング委員会 議事概要

日時：平成29年10月30日（月）13:00～15:00

1. 開会

事務局）〈開会の挨拶〉

2. 所長挨拶

事務局）これまで11箇所の掘削地が完成し、現在4箇所を施工しているところ。多くの蓄積を得ており、成果をまとめていきたいと考えている。地域の方に親しみやすい掘削地とするためにも名前が分かりづらいので、市民の皆さんと協働して検討していきたい。

3. 議事

事務局）〈資料5を説明〉

（1）前回委員会の議事概要

①植物重要種の保全について

委員）チョウジソウやシムラニンジンの生育立地や生活史の把握について、今後の方針を考えてほしい。生態を解明しないと復活させるのは難しい。

事務局）河川管理者が、どこまで生態を解明するかという問題がある。植物の研究者の方々からバックアップをいただきたい。

委員）チョウジソウやシムラニンジンについて、渡良瀬遊水地でどうなっているかということにははっきりしていないので、今後、協力しながら進めていければと思う。チョウジソウの自生地では、ヨシ刈りをしっかりしていくとチョウジソウが増えていくことが分かっている。

②イノシシ等への対応について

委員）外来動物やイノシシが増えている。大型哺乳類については、事故の危険性があるため、関係機関が対策を考えたほうがよい。

事務局）渡良瀬遊水地保全・利活用協議会で、イノシシやワニガメ等について、注意喚起を図る看板を設置している。引き続き、広報を行っていきたい。国土交通省が根本的な対応を行うことは難しい。

委員）イノシシに対して渡良瀬遊水地で罠をかけたことはないか。

事務局）罠をかける場合は、県からの許可が必要で、知識のある人が行わないと、間違っ、人が怪我することがあるかもしれない。どこまで河川管理者

が駆除するかという問題がある。外来植物であれば、国土交通省や農林水産省が主体的に駆除することもあるが、イノシシについては今のところ実施していない。

委員) イノシシ対策については、現場で、市、県、河川事務所、専門家が協議し、どのように進めていくか検討するのがよい。

③昆虫類の調査について

委員) 昆虫類の保全フローに関しては、いろいろな専門家の意見を聞いて作成することが必要である。

湿潤環境形成実験地(3)の昆虫類調査について、今後は市民団体や学識者などの協力を得ながら実施したいとのことだが、具体的なイメージを教えてほしい。

モニタリング計画というものがどういうもので、その内容が調査をお願いする人に浸透しているのか教えて欲しい。

毎年、同じ場所で同じ質の調査をしていかないと、年ごとの比較ができないが、そういった調査を市民団体にいきなり任せるとするのはたぶん難しい。

事務局) 事務局で、来年の計画をつめていないので、次回の委員会でお話しできればと思う。

モニタリング計画には、動物関係の調査は「NPO団体、周辺教育機関、学識者などの協力により調査を実施する」と謳われており、来年度の調査はそのような形でやっていきたいと考えている。

なるべく、事前に行った調査と同様の精度を確保できるように、体制を整える必要があると考えている。

事務局) 栗原委員には、調査の進め方や担当する市民団体などについて、アドバイスをいただきたい。

(2) 本年度のモニタリング結果（中間報告）

事務局）〈資料 6 を説明〉

① 大型鳥採餌休息環境実験地の調査について

委員）動物関係の調査は、市民団体あるいは学識者の方で実施するという事なので、我々も、今後、大型鳥類採餌休息環境実験地でどのような種が見られるか、気を付けて見ていきたい。

② 大型鳥採餌休息環境実験地の水位について

委員）大型鳥類採餌休息環境実験地では、渇水時に水位が下がり、水面が小さくなっていくと思うが、どの程度まで小さくなるかと考えているか。水面の面積が小さくなれば、水鳥に影響がある。

事務局）生物の観点からみて、できる限り水面を残したいと思うが、今年のような渇水時はやむを得ないと考えている。鳥類の観点から、どの程度必要なのか、ご指導いただきたい。

委員）水面が小さくなって鳥類が最も影響を受けるのは、繁殖期の 3～7 月である。水位が下がって干潟状の陸地が出てくると、それを目当てに飛来する鳥類もいて、一概に水位が下がることが悪いとは言えない部分もある。

事務局）掘削前の地下水位の計測結果から、Y. P. 11. 5m の水位を確保できるだろうということを想定していた。

委員）大型鳥類採餌休息環境実験地では、6 月から 7 月までに、水位が 1. 5m 近く変動しているが、渡良瀬遊水地の他の場所も同じように変動するのか。

事務局）そうです。渇水時には、他の場所も水位が低下する。

事務局）7 月の観測日は、雨が 25mm も降っており、雨水の影響があった。

③ 渇水と生物の関係について

事務局）植物や昆虫類の中に渇水時に影響を受けるものがあるか。

委員）今回の工事全体を見ると、池の周辺の湿性裸地には、シードバンクからの復活で、多くの貴重植物が出ている。これは、渡良瀬遊水地全体の多様性を高める結果となっている。ところが、常時湛水している場所には水草はほとんどない。水面が上下しても、水草がないので、渇水との関係はない。池そのものはどうなのか、疑問に思っている。池は、鳥類にとって有用な場所となっているようだが、水生昆虫はいるように見えな

い。池について、きちんと議論していただきたい。

委員) 昆虫は多様で、いろいろな水環境に適応しているので、一言では言えない。渡良瀬遊水地で問題となるような希少なゲンゴロウ類については大型の池より小型の浅い池が良い。そのような池は、完全に水が無くなることもあり、魚が死んでしまうので、そのような環境でゲンゴロウ類の種類が多くなると考えられる。

魚が生息せず、一年中、水のあるような池には、キベリクロヒメゲンゴロウという種が生息し渡良瀬遊水地に生息していた記録があるが、外来魚等の影響で既に絶滅したと推測される。

大型鳥類採餌休息環境実験地では、魚や鳥が多いことで昆虫の生息が抑制されると考えられる。

事務局) 大型鳥採餌休息環境実験地の池でなく、その他の掘削地のいくつかの池をネットワーク的な形で見えていくことが重要と思われる。

委員) いろいろなパターンの池があることが重要である。

④ 池の水収支について

委員) 池の水位を長期的に測ったという地点はあるか。また、数字として記録が残っているか。このような地点のデータは、水収支を考えるときに非常に重要なデータとなる。池がどのように減水していくか、それがわかると、水収支が予測できる。データを見せてもらえれば、後日、考え方をフィードバックする。

事務局) 大型鳥類採餌休息環境実験地と環境学習フィールド(3)に関しては、観測1年目であるが、過去の実験地に関しては、水位の変化が把握できている。それらは、毎正時にロガーで観測しているデータと、月1回メジャーで測っているデータの2種類であるが、いずれも数字として記録が残っている。

(3) 市民活動の報告

①わたらせ未来基金からの主要な活動報告

委員) 環境学習フィールド(3)の陽があたるようなトレイル脇でイヌセンブリやハンゲショウが見られるようになった。また、平成27年の出水後、クズが枯れた場所で、除草を行った結果、ノウルシやトネハナヤスリが増加した。駆除作戦によって、ホソバオグルマやタコノアシが増加した場所は立ち入り禁止して、現在は良好な群落となっている。以上のように、駆除作戦を進めることで、絶滅危惧種を含めて、様々な湿地性植物が復活している。全く手を加えないのではなく、どのように手を加える

のか考えながら、順応的に関わっていく必要がある。

環境学習フィールド(3)では、掘削後、水生昆虫が順調に増えていたが、平成27年9月の台風後にブルーギルやブラックバスが入り水生昆虫は激減した。水生昆虫の生息にとって、魚の影響は大きいと思われる。また一時期、ヒルムシロ系の植物が出たが、ザリガニが増えてから見られなくなった。以上のことから、「水生植物と水生動物の関係」や「水生昆虫と魚類の関係」を調べていくために、定期的なモニタリングが必要であると思われる。

②渡良瀬遊水地野鳥観察会からの主要な活動報告

委員) 第二調節池やその周辺でコウノトリに飛来し、カエル類、ドジョウ、貝類、昆虫類などを採餌行動が確認された。

渡良瀬遊水地野鳥観察会の今年の初確認種は、3種(ソデグロヅル、フチャフ、チュウジシギ)であった。

今年の10月26日に大型鳥類採餌休息環境実験地で多くのカモ類を確認した。10月25日に谷中ブロックにいたカモ類が移動したと考えられる。

③渡良瀬遊水池を守る利根川流域住民協議会からの主要な活動報告

委員) ワタラセハンミョウモドキが掘削地の一部で見られるようになった。今後はヤナギの駆除が課題であり、ヤナギの除去やヨシ焼き時のヤナギの減少で、生息地が増えると思われる。

第2調節池の実験地で確認された鳥類のうち、注目される種として、オオセッカ、チュウヒ、アオジが挙げられる。オオセッカは、10年ほど前から渡良瀬遊水地で繁殖が確認されるようになり、今年の繁殖期に、第2調節池の掘削地でも確認された。チュウヒは9月前半に確認されており、越夏した可能性がある。アオジは、本来、標高の高い場所や北方で越夏する鳥類である。渡良瀬遊水地でも越夏する個体が確認されるようになったが、これは北海道の湿原と環境が似ているからかもしれない。

(4) 今後の委員会の進め方

事務局) 渡良瀬遊水地湿地保全・再生検討委員会(親委員会)の桜井善雄委員長にこれまでの状況を説明に伺ってきた。これまでの取り組みを30ページ程度の概要版としてとりまとめてはどうかのご提案をいただき、事務局としても桜井先生のご意向を踏まえ、今後とりまとめをしていきたいと考えている。これまでの状況を説明したところ、良い方向に進んでいるようで安心したと言っていた。

今後の進め方としては、モニタリング結果を冊子のような形でとりまとめ次のステップに進むために、親委員会を平成 30 年度に開催したいと思っている。桜井委員長は外出が困難であることから、委員長代理を選出し開催することについては事務局に一任いただいた。

(5) その他

①スゲ原再生調査区のとりまとめについて

委員) スゲ原再生調査区の春季調査はいつ実施しているか?

事務局) 5月中旬から下旬に実施している。

委員) 撒き出しについては賛否両論あると思う。スゲ原再生調査区では、春季の調査で植被率が多いところでは70%近いがスゲ類は非常に少ないということであるが、それでは、多かった植物は何か、次回の委員会で整理してほしい。最初に生えてくる植物は何なのか、また、それらがどう変化するか、確認してほしい。春に増えるものと、初夏から増えるものがあり、それらの兼ね合いがある。種構成の変化をしっかりと整理してほしい。今後撒き出しを進めるときに、どういったときにどういった植物が増えてくるのかを把握しておくことは大事。過去にツルマメばかりになってしまったときに、急遽7月にツルマメを切ったらその後よい植生になったという事例もある。

事務局) 次回の委員会でデータを整理する。

②湿性裸地の創出について

委員) 湿性草地をどう残すか。湿性裸地をつくるには表土撒きだしは強すぎるというお考えの委員もいると思う。天地返しなども実施したらどうか。表土撒きだしを行わないことで、一時的にはうまくいかなかったとしても、放置しておいて、どのような植生が回復するか、見ていくようなチャレンジも必要である。

事務局) 攪乱的な話であれば、人為攪乱型実験地で状況を確認できる。

③人為攪乱型実験地の耕起について

委員) 現地視察資料で人為攪乱型実験地の説明で、「耕起の頻度を減らして維持管理の負担を軽減する」とあるが、代掻きなどはそれほど労力のかかることではない。耕起の間隔をあけると、逆に負担がかかることもあるかもしれない。年2回の耕起もありではないか。

事務局) 方法については順応的に見直していきたい。小山市に占用していただいて、地元と協力しながらやっていきたい。

④掘削地の名前について

事務局) 現在の掘削地の名前は長く、覚えにくい。例えば、地元が親しみやすい名前を公募することなどがあり得る。今後、その辺について検討していきたい。

4. 閉会

事務局) 〈閉会の挨拶〉